

## 不變的エクスタシーの渴仰

一ノ三、甲、一 竹原二郎

### 【一】

*This strange disease of modern life,*

*With its sick hurry, its divided aims,*

*Its heads of eyetaxed, its palsied hearts,.....*

*Mathew arnold.*

凡て思想の傾移趨向は必ずしも直ちに思想そのもの、本質的進運を意味するものではない、故に思想の流行を透ふてそれを没批判的に體得し以て自己の生活に誘致して意義あらしめんとし、少くとも之れがために生活の内容を豊富にせんとするは卵を見て時夜を希求するの早計たるを免れない。然し思想の繼受は自由なれば廣汎に且つ深刻にあらゆる思想を抱擁すべきことは最も文化的にて又開發的であるが思想の潮流に耽溺して盲目に感染したほど悲哀と愚暗との極はない。吾國は地勢上大陸の場末に位せるが故に従つて種々な思潮が流れて來るし又文化と云ふ廣義の點に就いても過去に於いては勿論現今に於て智識階級の教養が概して西洋の文化と思想とに密接な關係を有してゐるし、又或意味に於て文化は世界共通のものである限り西洋の感化影響より罷脱することは到底不可能である。而し乍ら我國民には同化性と稱する中和藥を先天的に保有するが故にさまで神經衰弱的に杞憂を巡らすの要はないがそれにしても斯る現代に當面しては自己の存在と

自國の文化とに關する本來の自覺を保持し獨自の本質的價値を放擲せないように、明瞭な批判と鋭敏な考察とを以て是れに接するが妥當であらう。時處を没却して觀た思想には矛盾と誤謬とが多くて人間生活そのもの、基調にふれ、周圍に磅礴する概汎な思潮の核心を柵むことは難中の至難である。

さきに在來の思想と新移入の舶來思想との二潮流が巴形に廻轉を始め漸次加速度を加へて殆んど停止が出來ない状態なりしが——即ち城廓の外に自然を見たる客觀的ギリシャ思想と、人生即ち自然を悟れる内觀的印象思想との衝突激越を極めしが——一時大いに流行せし新移入思想も漸く行き詰り、在來の思想復活の時機となつたのである。換言すれば建國創業の皇室中心の精神と佛教の報恩的精神とが打成一九となり、唇齒輔車の關係になつた確實なる思想は毛色の異つた西洋の思想に侵されぬ質實正確なるものであると云ふ裏書きに相違は無い。

一滴の水、東に落ちてはガンデス揚子江となりてアジア民族を育成し、西に落ちてはゲニユーブ、ラインとなりて歐洲人を育成し末に於いては將に千里の差を生じた。そして吾國道德思想の根帯は君臣父子の相離るべからざる恩愛抱擁的の關係より起り、西洋のそれは夫婦の交換差別的關係より起因したのである。又東西兩洋の民族はアルタイの山嶺より分れて一は東に移りて農を以て本とし定住生活をした是れ沃野千里穀物豊饒にして生活資料の豊富であるからだ、一は西に下りて荒寥茫莫たる原野を徘徊し牧畜を業とした。彼等は開拓を先きにして業に就き食資不足になれば更に他に轉動して移住生活を反復した。一は靜的定住生活を一は動的移動生活を營んで二者相反すること甚だ遠しである。故に歴史の長江を遡つてその起原を檢覈するに原始時代にありては斯の如く生活狀態を異にし近くは道德思想の標準に差錯がある。然るに近代に至り歐洲の文化

輸入と共に徒らに本然の性を異にせる西洋思想に眩惑し沒批判的に是れを謳歌した淺識者流こそ寔に失眠の至である。此の異つた思想には我國民が到底消化し能はざる渣滓が澤山にある食物の渣滓が胃腸を害するやうに此の不消化なる思想の沈滯こそ實に社會の愚衆を蠱毒するものである。思うて茲に至れば菅公の和魂漢才が只管に念頭を往來して止まないのてある。

曾て英のペーコン卿が「萬事は失しても科學は生長すべし」と叫んで以來不思議にも適中した。此に彼れの炯眼は存するのであるが之れが爲めに遂に十九世紀は科學萬能主義となり物質過重の思潮が長足の進歩をなした。而してそれが物質觀なるが故に有機的精神的權威や内在人の存在を蔑視して價値の實質を功利的に考ふるに至り現今甚しきに至りては木村鷹太郎氏の如きは鄒魯派の聖賢の道德的教訓をも功利主義だと論定するに至つたのである。斯る偏見に満ちた批評主義は次第に夢幻に流轉して人心を危機に陥らしめ社會を毒するや過激にして深酷を極む。

而して今や個人主義快樂主義利那主義等の曰く某曰く某々イズムの情調が脂を流したやうに漲つてゐる、又小利微益に纏弄せられて天賦の本職を忘却する實利主義打算主義等と共に經緯の絲となりて奇怪なる不鮮明な縞を日々に織りなして進んでゐる。彼等の眼識に映する對象は感應を唆る挑發か、又は人肉を食ひ鮮血を啜つて自我の腹を肥さんとするエゴイストで華やかに太く短かく人生に酔ひ耽る奴輩である。假令近代の遊蕩文學者が頻繁に此種の意味の病的な不健全な小説を上梓すと雖も之れは近代人のデカタンの墮落の傾向を赤裸々に暴露するに過ぎずして決して吾人の理想や生活の意思的標準を啓示するものではない、否それらの神聖な職を果敢するだけの價値と人格とを有するものではない。斯の如き姿睢淫樂、サタンの生に眩惑した

者、數字で言へばiの付いた虚數に等しい仕末に負へない者は自己も家庭も國家も皆な物質視して社會の實狀を偶然の機會視して恥ぢない。即ち現實に執着し未來を忘却し飽く迄サタンの本領を發揮して人生の歸趣を無視し鼓腹擊壤の夢を貪るものである。斯る思想の浸潤する所には國家なく、社會なく家庭なく畢意自己をも破滅するに至るのである。心ある者は深く現代人文の缺陷に鑑みて蹶起してゐるのである。是等の惡思潮は明治の初年に福澤翁が日本の實力は物質的内容に乏しいと云ふ持論より武士道を輕んじ宗教を無價値となして排斥し専らに經濟力の扶殖を強調して教育上の中心主義とせられたところの一面には時代を洞觀して居られるが一面には偏黨せる廢類した術策に原因の一がある。此時に際して新島襄、中村敬宇二先生が對立して精神主義を鼓吹せられ以て務むる所ありしが未だその旭日東天の唯物主義を匡正する能はずして遂に現代に及んでゐる、故に現代に於ては物質主義を切り下げて精神主義に平均せしむるよりも精神主義に鞭策を加へて物質と對等の位置を保たしむるが目下の急務である。凡て現代のあらゆる不満足、不均衡は他に原因あるにしても要は精神物質二者の不調和より由來してゐると斷定しても過言ではあるまい。然し此に現代を救濟する方法として又吾人が過度の現代に當面するの方策として徒らに道學者の高壓的「せざるべからず」に憑るとも是れは一時を彌縫するか又は表面上の指針を示すに過ぎずして決して根本的、持久的療法として存續さるべきものではない。宜しく内心よりの發露を促して感激の聲能動的發心に倚りて期待せねばならぬ故によく人心の根抵を極め病弊の侵せる所を眞摯に査覈して各自の大自然を翹望すべきものである。此の現代を救濟するの目的を實現するの手段として法律、道德風俗、社會學、哲學、凡て可であらうが理智に基いた客觀や批判的態度では徹底するものではない。吾人は自己を後にして他を先きにするほど陽氣ではない、

故に對岸の火災視を去つて眞實に自己を内觀して主觀的見地に立脚せねばならぬ。彼のデルフオイの殿堂に詣づべき石造の門柱には何と刻してあるか、「ケンネ、デヒ、ゼルプスト」とある吾人の辿るべき道は正に是れである。孔子の「内省不疚」とか「三省其身」と云ふも又同じ範疇に屬するのであらう。

今や國家の狀態を分析考察するに表面と内實とは日々に懸隔を生じつゝある、人心は篤實より薄弱へと墮落しつゝある。身は高位高官にありて一世の指導者木鐸ともいはるべき者が却つて害惡を下層に流してゐる類もある。屈原にあらざるも「世人皆濁れり我獨り清めり、世人皆醉へり我獨り醒めり」といひたくなる。國家は實に自覺せるの士を切に希求してゐるのである。かく國家の要求なる人物經濟の上よりしても亦外に吾人の個人的見地に立脚して近代生活の暗黒なる頽廢から擺脫して曙光に輝いてゐる新鮮なオゾンに満ちた文化に浴して意義ある人生を永劫に生き常住のエクスタシーを渴仰せんがために努力したのである（頭書の英詩參照）。エクスタシーとは自己恍惚純粹感情の合一、入神の態、無量壽國の解脫味である。然らば此の自覺、不變的エクスタシーの渴仰は何によりて達成され得べきか。此の自覺の發現も永劫にエクスタシーの渴仰も總じて吾輩は叫ぶ宇宙の眞理を根柢とせる宗教的信念に依憑せねばならぬ。而して自己が自覺より得た能力は人格の内容であり、エクスタシーの境地は人格の規模である。故に人格の優劣は規模の大小のみを以て沙汰すべきものにあらず將た内容の充、不充を以て評價すべきものでもない。人格の優劣は規模（ $x$ ）と内容（ $y$ ）の相乘積即ち  $xy$  を以て表示せられねばならぬ。此の意味に於いてその信仰する宗教も理想的にして且つ實行的の宗教たらねばならぬ。

近來エクスタシーの渴仰に就て藝術論者が雨後の筍の如く東西に甲論乙説を弄してゐて、なるほど藝術は神

聖である、その理想たるや大いに賛成に價値がある、故に少くとも教育階級の零圍氣にある者は此れに興味を寄せて、仲々熱心である、吾輩藝術に就いて潜越乍ら一言述べよう。彼のカントガ心的要素を知情意の三に類別した(元より確然と三別せらるゝものではないが)によれば藝術は正に情的躍動が他の理性的意志的躍動よりも旺盛である時或は比較的感情に豊富なる者から起るので詩歌、繪畫、戯曲、彫刻の所以も之れからである。然し乍ら感情そのものは本質上刹那的動搖性を有するものなれば、その藝術的作物は自然に刹那の情調を表現するにすぎない。然し乍ら一時的のものであつても兎に角く内容は擴充してゐるから假相ではなくして渾然たる統一体をなせる人生の實相的一表現であるは論を俟たない、故に此の感情的眞性を呼んで美だと稱へてゐる。譬へば打ちおろす鐵槌の尖端より散る火花の如きものである、依つて打擊が強ければ強いほど大なる火花は散り偉大なる藝術は生れる。然し乍ら要するに轉瞬的の美の享樂にして永遠のエクスタシーではない、藝術そのものが直截に永遠に人性の全部を表現するものではない。人生は實に意志の存續であり力である。意志の本性は自己を充實し創造し進化せしめざれば止まないものである。宗教はその宗教的動機を此の意志の表現に措いてゐるから眞の人生は宗教的生命に歸一せねばならぬ。吾輩は藝術を絶対に排斥し否定するものではなく或る程度迄は肯定するものであるが更に百尺竿頭一步を進んで眞實の人生に究意的徹底を要望するものは必然宗教的信念に俟たねばならぬ。

吾人は如上の宗教的信念の上に立ち眞に覺醒してこそ始めて過度期の現代思想界に處することが出来るし又終生を通じて凡ての苦より歡喜を得、凡ての悶絶より大慰安を得るに至り、然して國家の原子たる個人が各自健全に生きて始めて國家の生存も安泰に強勁になり得るものである。

以上思想の變遷よりして宗教的信念の必須なることを大略乍ら吾輩の所感を概括して述べた次第であるが、此れにより此れを綜合するに吾人は共に必勝的凱歌を高唱し大手を擴げて現實に權乎として踏みしめ踏みしめ針の山も焰の池も懼れなく慕進したいのが常の本願である。余が持ち馴れぬ鐵筆を馳らせ駄句を列ねて紙面を汚し且つは諸君の謹み深き耐忍を請うて最後迄通覽を臨むのも百人は百人ながら千人は千人ながら相携へて勝鬃と慰安の美酒で乾杯し不變的エクスタシーを享樂して生の意義に徹底味を体得し生存の價値を實現して先きのxyの相乘的人格に到達したい祈念からである。

而して本論に於いて是れを説明するために東西に於ける種々の哲學と宗教とを引証して横豎の交叉圖式に於いて解説を加ふるのが當然の順序であるが紙數に制限のあることなれば之れは抜きにして淨土眞宗親鸞聖人の教義によりて究竟の斷案を指示するの餘儀なきに至つてゐる、客觀的に論ずるならば此の教義は常住の山に上るべきワン、オブメニー、ミーンズ、であるけれども主觀的に論ずるならば他に求むべきの道もなきザ、ミーン、であるからである。

吾輩此の一編を起草するに當り内容の十分に正確なるは疑ひなれども此れを疑ひなしと論定するも自己の批判的意見に基くものなれば若し客觀者から批判して不合理たらば余の過失は勿論責任あれども是れがために諸士の懸望に陥らんことを眞實に畏懼するものである「丘や幸なり過失ある時は必ず人之れを知る」と以て諸士の批判を乞ひ併せて缺陷あらば高論を翹望するに忠實なものである。

### III

山は魏々として聳ね水は洋洋として流る。花咲く春あれば黄葉の凋落する秋が来る。時と處とは宇宙人生に意義ある所以で若し此の兩者を除かば宇宙人生は虚假のものとなつて成立存在しないものたるは敢てカント

の立論をも要せないのである。高山に登りて群峯を俯瞰し衣を崖上に振うて放歌吟詠すれば、知らずして氣魄大いに加味し、力山を抜き氣は世を蓋ふに至るべし。下つて煤煙千丈喧噪轟々たる市井にありて生の問題に醒醒したり日夜靈肉の疲憊を覺て呻吟する時は實に千仞の庭深き暗室に幽閉せられたよゝである。年少紅顔なれば意氣軒昂にして四肢潑濶たるが、やがて老の將に至りて鶴髮亂れて絲の如くなれば凡て心裏に表はれた幻影も打ち消れて快々と樂まない。或は輕車肥馬堂々と宴安に耽る豪者もあれば、赤脚草鞋夜々として刻苦する貧者もある。筋肉稜々快活に遊ぶ者あれば陰鬱に身を陥れて懊惱する病者もある。又種々なる植物あり、礦物あり、動物あり、美醜あり、動靜あり、凡ての事象は須臾も停滯することなく日月星辰の運行を始めとして常に變轉移動して止まない而して天動地定説の古代の説はコペルニクスによりて破られて天定地動説を立てられたが最近に至りて天動地動の兩動説即ち太陽は或る方向に直線に推移しつゝあると云ふ天學上の新説が立てらるゝに至つた。靜かに思索考察を宇宙人生に巡らさば實に千差萬別の感が油然而として湧出し神秘學者メートルリングをして謂はしむれば『不思議な運命に對する恐怖』とか『とりとめもなき不安』を叫ばしむるであらう。

然らば宇宙の本體は奈何なるものであらうが、吾人が理智を以て分析批判する差別的相對的のものではない吾人が觀て意識に映するものは只五官より來れる客觀の世界であつて部分的である。而して理智的神學の宇宙解釋は現代及び現代迄は既に破産してゐる。王陽明の所謂『虛靈不昧、衆理具て萬物出づ、心外無物、心外無理』と、而して例へば問うて曰く『深山の華樹の如く自ら開き自ら落つ、我心に於て亦何ぞ關せん』陽明が答へて曰く『未だ此華を見ざる時は此華汝の心と同じく寂に歸す、若し來つて此華を見る時は此華顔色一



時に明白起り來る、便此華汝の心外に在らざることを知る』と即ち自省により自己の全量を以て觀ざれば萬物の全部は觀られないのである。それで割切なる徹底心眼を以て洞察するならば感官の對境となれる萬有は宇宙の本体より岐出したもので眞如法性と稱すべき絶對無限のものであり不變的のものである。決して感官に寫象されるものではなく眞の實在である如實である、空とも自然とも云ひ不可稱不可思議、不可說のものである。然れども眞如と云ひ法性と云ふとも吾人の觀察は凡て相對的のものなれば假令、今、無限のものであると斷言しても是も及ばぬ。眞の絶對なるものは吾人の口筆に上すべき或は思考に訴ふべき性質のものではない、又是等によりて氷解され待べきものでもない。然し説明されないとして決して虚なるものではなく眞實の客体であつて宇宙間に遍滿せるものである。三十二の菩薩が互に宇宙の本体を力說せんとした時、知慧の菩薩、文殊が全身の腦漿を絞つて『心縁の相を離れ、文字の相を離れ、言語の相を離る』と否定主義に説いた。實に翫味ある言だ。然し乍ら口舌に上して説いたるが故に誤つたのである。次に維摩に至り彼は只默せるのみである。之れ維摩の一默雷の如しと稱して此の消息を良く蒸餾に實証したものである。斯く宇宙の本体は一如にして森羅萬象は此の本体より顯現したもので、柳の緑、花の紅、滄々たる水の響も、突几として聳ゆる山嶽も皆眞如たらざるものはない。故に形態上には分立的なれども本体は統一的のものであつて確乎たる本源が實在してゐる。故に現象界を眺むれば差別極りなければもその本体より觀れば萬物皆平等である。釋尊が難行苦行して冥想に耽りしも、或は深林に或は道場に入出して道を求めたのも此の不可思議なる宇宙の眞諦を穿知せんがためであつた。其の悟は菩提樹下獅子座に於いて開かれた。此の際大地は六種震動し天は華雲を降らして釋尊の正覺は萬有の眼睛となつた。釋尊出世の前においては萬有は只物質と努力とに過ぎず

時間も空間も死的概念に止つてゐた。されど見よ眼睛は點せられ天地の光景は一變して來た。萬有は皆獨自の生命を持ち、獨自の時間を持ち、獨自の光明を持つに至つた。そゝして各自は限りなき未來の希望に輝く正覺の曙を謳つて歡喜に胸を躍らしてきた。

釋尊の此の生きた悟こそ即(そのまゝ)であつた、平等そのまゝを差別と見た、統一そのまゝを分裂と見たのである。色即空か此の悟である。此の大眞理の泉は永劫の間發見者を待つてゐたが茲に釋尊によりて始めて死の境地から生きた現實に抜き出されたのである。色とは色あり形あり現象界にして空とは眞如のことである。此の變態多き複雑零細なる差別界を達觀して此の状態そのまゝを一如と叫んだ(尙ほ釋尊の悟りの究極は天台の三觀論やの論說には差當り要なき故に省略す)又一步を進んで華嚴の四法界にあるが此

部と部分との關係にて元より表現歸一の關係をも含むものである。生死に捕はれた煩惱そのまゝが無始無終極樂の妙境界に菩提を得るのである。此の即は二而不二の意にて中道實相の妙理である。右に開きて色となり左に開きて空となる釋尊の一代の説法も卷いて收むる所は此の即字に歸一するのである。此の即こそ一字不説で説明の域を超越し研究の羈絆を逸せるものである、即ち大悟徹底の妙味は此に味はれるのである。故に悟りの妙境に到達すれば自身以外に宇宙なく宇宙以外に自身なき見地に立ちて生死何者ぞ苦樂何處にかあると云ふ偉大なる金剛力を得るものである。一禪僧の詩に

空——眞如

天地觀來渾是空、  
到頭無始亦無終、

眞如妙理我知了、柳自青々花自紅。

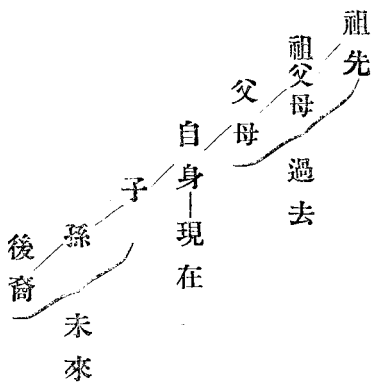
青柳紅花を見てよく宇宙の眞理を賦したものである。前述の如く宇宙の差別界を本体に歸一すれば平等なる平等觀が存すると同時に差別觀が存在するのである。即ち宇宙の本体は種々の因縁によりて現象なる果を得るものである。而して此の縁なるものは實に無盡數で歸納しきれないものである。故に此の現象界には一として等同のものはなく一見して等同の如く見ゆることも微細に甄別すれば皆各自の使命を有してそれぞれ差異がある。一々の例証について闡明しても明確な事である。

相對即絶對、有限即無限、或は差別即平等たるは様々たる波に起伏高低あるけれども互に相連絡のあるが如きものにて波の各々について見れば差別があつて或は高く或は低いものである。然し水なる本質について論ずるならば皆平等である。佛教は斯の如く平等觀と共に差別觀をも説けるが故に凡ての事物について實証を施すも何等痛痒を感じたり窮るところが更がない。平等觀より云へば世界人類凡て一視同仁にして博愛を以て本旨とすべきは勿論である。此の一視同仁も單に空論説や權謀術數のために徒らに仁を怙るのではなく宇宙萬物の本体論に對照した實に徹底的のものである。然れども差別觀よりする時は博愛の上において主と伴となる輕重蹊徑のあるべきは當然である。世界各國には君主ありて神聖犯すべからざるものなれども我帝國臣民たる者は我皇室を絶對至尊として敬虔すべきものである。親なるものは子のある至る所に遍周してゐる。然れども自己の親は凡ての親中の最も尊き親にして隣家の親と自己の親と親疎なること就れであるか。徒らに平等のみを主張して差別を説かざる宗教がありて吾が至上の國體と差錯衝突するが如き齟齬あるならば挽

いては下剋上の非道となるが故に大いに反省を要する次第である。差別ありてこそ平等の存在するもので差別のなき平等は成立しないと云つてよからう。平等とは互に融通して一方にのみ偏するを許さないものである。即ち衡平の意である。

峯は雪、麓はあられ、里は雨、ひとつの水の三つに見ゆらん。

以上は宇宙の横的觀察であつて空間的の説明である。豎の觀察と共に宇宙萬有の説明として必須なものである。今此の説明の一端を紹介するに先ちて儒教の三世觀を説かん。儒教においては一生を現代とし、我れより遡りて父母祖先を過去と名け、我れ以後に孫を未來と分類してゐる。即ち斜に三世を貫けるものであつて之れを圖解すれば



此の三世關係も亦互に緊密で決して離反するものではない。親の因果は子にかゝる、と云ふ馬琴の稗史小説

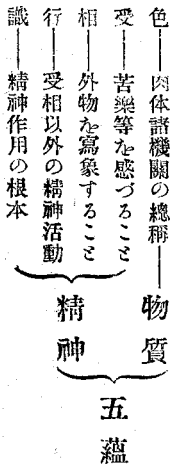
に見ゆる思想も之れを中心としたもので、易經に、「積善の家には餘慶あり積不善の家には餘殃あり」と説き、又彼の榮根譚に「祖先の德澤を問へば吾身に享く所のものは是れなり、當に積累の難きを念ふべし、子孫の福祉を問へば吾身に貽すところのものは是れなり其の傾覆の易きを思ふべし」と云ふ概念は實に理論並びに日事經驗に照らして多くは實証されてゐる。進んで佛敎の三世觀は更に徹底したもので自身の過去を祖先に遡らずして自身の前世を言ひ、未來と云ふは子孫にあらずして自身の後世を指してゐる。

前世—自身—後世  
過去、現在、未來

佛敎は右の圖に示せるが如く垂直に三世を一貫せるものにて儒敎は斜線に貫いてゐる、儒敎の斜的見解も此の垂直的考察から起因したものである。此の宇宙は神や創造主にありて造られたものではなく無始無終に實在せるものなれば吾等自身は宇宙の一分になれば又無始無終にて久しく生死界を輪廻浮沈したものである。救世の神が吾々人間を創造したものとすれば醜や悪や不運はある筈のものではない、然してその神なるものは奈何なる原因ありて成生したものが屢氣樓ではあるまいし忽然と存在し原因結果の因果律を無視する事は出来まい、それにあると肯定立論するのはデレンマに陥つてゐるのである是れ程、明らかな事はない。佛敎においては人間の境界を十界に分ちて今四六相對によりて分てば地獄(瞋恚の因にあるもの) 餓鬼(貪欲の因によるもの) 畜生(愚痴——) 修羅(爭鬪——) 人間(五戒——) 天上(十善……)の六道と聲聞、緣覺、菩薩、佛の四界である、吾人は此の迷界の六道を不斷に輪廻せるものである。故に人面獸心のものありて往々修羅を演じて他を害し貪婪を逞うし、瞋恚の焰を燃してゐる。表面には脂紅紛黛を施して裝飾に違なく巧言令色

以て身を飾るとも何時かは自己の奥突にある眞實性を暴露し、又は暴露されて懊惱悶絶する時機がある。實に吾人の心性を深酷に穿索すれば眞實の誠は有り難く虚假不實の我身に於て一毫も清淨の心なきを覺ゆるのである。斯くして輪廻説は確實なる論理的階段に合理的なる基調より成立せるものにて三世因果の法を研究すれば自明に氷解されべきものである。現今の精神界を瞥見するに近年頻りに神秘思想を抱くに至つた、即ち精神活動の中樞には不可思議なる統一的一物ありとして而も之れを探求するに既に理智の有限なれば求めんとして求むべからざるの悲哀に行き詰り全く眞秘だとして考察の緒につかざる元の原始的氣分に還元して、懷疑に陥り乍ら從來の探求的努力の過程に小康を委ねてゐる。然れど凡ての精神の内的活動や事物の相對關係を説明せんには先づその中樞たる統一的一物を的確に定めざれば精神科學も基礎頗る薄弱たるを免れない。此において心理學者の先進者が佛教の深邃なる教理を研覈して益々學界の缺陷を補填せんとする傾向は實に喜ぶべき現象である。

此の輪廻説は容易に數枚の紙片を以て完全に擴充する事は出來ざれども、今その大略を陳述して一般を伺へば凡そ人間には肉体と精神の外、他に何物もないとするが佛教の根本哲理で之れは現代の形而上においてすらも肯定する所であらう。之れ佛教の無我説で無我とは吾人に精神、肉体の外に吾人を支配すべき何物もなきの謂にして五蘊假合の説によりて、闡明せらる事が出來る。五蘊とは色受相行識の五なり。



右の五蘊の假合によりて人は生れ、人死すれば元の五蘊に分散するのである。

引き寄せて結べば柴の庵にて、解くれば元の野原なりけり。

故に生命斷絶して五蘊歸るが故に肉体も精神も茶毗一片の煙となりて消散す。然し乍ら吾々は更に五蘊の假合によりて自己を生じ日々、業なるものを作るのであつて之れは一種のエネルギーである、種々の善惡の行爲は五蘊の假合によりて生ずるのであり、日々の生活は業によりて導かるるのである。故に業の力に引き曳きせられてゐるので業の繫縛以外に一步も出ることは出来ぬのである。依て五蘊の外に吾々の分子はなく即ち五蘊を超越した行爲を營むことは出来ぬ。例へば吾等の現代の能力が自己の過去の經驗に立脚せるが如く即ち過去の經驗的範疇を根底として後來の新物を創作するに等しいのである。その過去の經驗たるや單に自己の經驗に止まらず父祖の經驗や血統の影響を享けてゐる。故に吾人は無始無終に五蘊の假合離散によりて生死界を幾度變易すとも素より業へと輪廻せるもので從來の吾れが忽然と他の者に變ずるものではない。故に吾人は假令命終りて五蘊離散すると雖も、一度蒔いた種が地中に埋もれて懸て芽を吹き出すやうに業力は不生不死にして此の業力が更に五蘊を組成して來世の果報を生ずるものである。故に遠く過去を回顧しても將來に思索を馳せても共に生死界の連鎖であつて大海の一波の如く彼の前波を飛躍させた力は相次で後浪を高く上す力となる。即ち現在の業力が因となり來世の果を生ずるものである。故に佛教が殊に現世の行爲を高調するも一は此の業力の果によりて來世に繼承すべき惡果を恐るゝからである。

佛教は斯の如く現代的の横の觀察に止まらずして三世を通して行爲の慎重を忠實にし、西郷先生の如く人を相手にした表面的生活を忌憚して自然の理數を對境にした行爲を眼目とするのである。名利の大山に迷到し

たり貪婪の廣海に沈没せる現代近視眼者流に三省を要望するのである。斯くの如く横遍十方堅徹三世の妙理は偉大な權威として顯現するので前生の因を知らんとせば今生の果を見よ、來世の果を知らんとせば今世の因を見よと云ふ格言は道德行爲の策勵としても適切なものである。

要するに佛教は上述の如く十方觀と三世觀を力説してその根抵の上に色即空、相對即絶對が存在してゐるのである。實に幽玄絶妙な宇宙の眞理は極めんとして益深く、測らんとして愈々高く説明至つて拙劣なりしが淨土眞宗に現はれたる眞理觀は大略此れである而して次に此の大自然界に遊泳してゐる吾人は本來奈何なるものであらうか、古來より大家の説、種々ありて甲論乙駁の状態である。(編輯上以下次號に譲る)